心ひとつに

弥富市立桜小学校
学校だより
No.11
平成25年9月4日

２学期始業式の話から

２学期の始業式を９月２日（月）に行いました。１学期の終業式の話の中で、「長い夏休みの中で、いろいろな体験をしたり、いろいろなことに挑戦したりして下さい」というような話をしました。「それは、学校で行われるブラス・バトンの練習、長刀の練習、サッカー・バスケットの練習など、何でもいいから目標を決めて、その達成のために挑んでください」とも言いました。

子どもたちは、それぞれが所属する部において、欠席や遅刻はほとんどなく、厳しい練習に参加し、技術や精神力を培い、仲間との協力、チームワークという面での成長を遂げることができました。

学校の教育活動ではありませんが、海部地区子ども会スポーツ大会（ドッジボール）において、桜小の子たちが準優勝に輝きました。これは、久しくなかった好結果のようです。*「練習の過程で６年生のリーダーを中心にどんどん強くなっていくのが実感できました」*と、指導して下さった方が話してくれました。

また、新聞にも掲載されましたが、４年生のＫ子さんが、４月～８月に愛知や東京、大阪であった空手の４大会で優勝するという輝かしい成果をあげました。

こうしたがんばり、成果を全校児童の前で表彰・紹介するとともに、皆で拍手をしながら、それぞれのがんばりと栄誉を称えました。

かえって良かったです

豊橋市の松下芳子さん（９３）は、骨折などで足が不自由になり、週２回デイサービスに通っている。元気だった８０歳ごろまでは一人で電車やバスに乗り、どこへでも出かけていた。２００５年に愛・地球博が開催されたときは、１日中、会場内を歩き回ったそうだ。

まだ、一人で歩くことができたころの豊橋鉄道・渥美線の車内での話。松下さんが高師駅から乗り込むと、満員で座席は空いていなかった。重い手荷物があったので、「弱ったな」と思っていると、膝の上に幼稚園の年長さんくらいの子どもを抱いた若い母親が、「どうぞ」と言って席を譲ってくれたので、遠慮なく座らせてもらった。その後、母子は少し離れた窓際に移動し、ずっと立っていた。

終点の新豊橋駅に着いたとき、松下さんは、乗降客をかき分けて母子のところへ行き、「先ほどはありがとうございました」「坊やありがとうね」とお礼を言った。

子どもはピョコンと頭を下げてにっこり笑った。母親は、こう返事をされた。***「いいえ、こちらの方が景色がよく見えて、かえって良かったですよ。」*** 松下さんは、この一言に感銘を受けた。席を譲られた人は、譲った人に対して、感謝とともに申し訳ないという気持ちを抱く。そんな心の負担をかけさせまいとして、口から発せられた言葉に違いないと思ったのです。

「もう十数年前のことですが、今も忘れることができません。人に親切にするときも『かえって良かったです』と相手のことを気遣う。なんて美しい日本語なんでしょう。あの母親のお子さんゆえに、きっと礼儀正しい大人になっていることと思います。」と松下さんは話す。

中日新聞　「ほろほろ通信」より